

小平市公共施設マネジメント推進委員会

日 時 平成30年10月22日 午前10時～午前11時40分

場 所 市役所5階 504会議室

出席者 推進委員 6人（欠席1人）

出席課 14人（行政経営担当部長、政策課担当係長、財政課長、行政経営課長、公共施設マネジメント課長、公共施設マネジメント課長補佐、公共施設マネジメント課担当係長、公共施設マネジメント課主任、文化スポーツ課長、文化スポーツ課担当係長、文化スポーツ課主事、施設整備課長補佐、教育総務課長、教育総務課長補佐）

傍聴者 2人

1 開会

2 小平第八小学校及び小平第十一小学校における更新等の適否の判断の検討状況について

資料1の概要を説明した。

C委員:小平第八小学校には八小遺跡、鈴木小学校には鈴木遺跡があるが、遺跡の部分に関するところが今回の資料にはないが、考察済みか。

公共施設マネジメント課長:八小については周辺に遺跡があることを認識している。そのことについて追記しておくようにする。大きな建て替えの際には障害となるかも知れない。

A委員:それは資料1④の2ページ3の2行目に「八小遺跡と名付けられています。」とあるが、そこに付け加えるということか。

公共施設マネジメント課長:そうである。

E委員:資料1①の2ページの「一般原則」についてにあるグルーピングとは、複数校を1校に統合するということでよいか。

公共施設マネジメント課長:そうである。

E委員:コミュニティゾーンについては、どのくらいの規模、数を想定しているのか。

公共施設マネジメント課長:小平市の場合、小学校区単位での地域コミュニティが充実しているということが推進計画においても述べており、小学校を中心にすることが基本になると考えている。グルーピングした場合に、複数の小学校の区域が一緒になるということで、既存のコミュニティの断絶ということが大きな課題であると認識している。行政側がこういうコミュニティになると作るものではないと考えているので、あくまで今の小学校が一つの拠点となっているという状況を基本として検討していくことになるイメージである。

E委員:市町村合併の際など、それまで役所が町の真ん中にあったのが、合併によりどちらかの市町村民にとっては遠くなってしまったりすることもある。グルーピングによってまとめることによって、どちらかが整理されて廃校になるわけで、その場合に拠点がどちらかの地域に偏る

ことになると思うが、それはそのように理解してもらおうということでよい。

公共施設マネジメント課長:まずは大きくグルーピングをした上で、そういったことについて考えていくことになると思う。グルーピングしてすぐコミュニティが一緒になるということではないので、長い時間をかけてということになると思うが、それを出さないわけにはいかないと考えている。八小と十一小の更新等の適否の判断をするに当たっては、その前あるいは同じ時期に、グルーピングの検討をしていかないと、どうなるんだということになってしまうのではないかと認識している。

E委員:コミュニティゾーンの中に拠点はいくつあるのか。

公共施設マネジメント課長:2062年までは小学校を14校程度にしていくと掲げているが、今後の国勢調査や人口の状況によって変化する可能性もある。まずは現段階では計画の中で14校程度と掲げている。

E委員:コミュニティゾーンの中にある小学校1校だけが拠点になるということか。他の公民館等は拠点として位置付けられないということか。

公共施設マネジメント課長:基本的には小学校を建て替えるとした場合には、そこを地域の拠点として公民館、地域センター等をその中に複合化していくということを基本にしているので、小学校がコミュニティの拠点になると思う。

E委員:基本的には小学校がコミュニティの拠点になるということであって、その他の施設は順次統合されていくということか。

公共施設マネジメント課長:そうである。今の長期総合計画の中では、地域コミュニティの拠点としては、小学校と地域センターも掲げられているが、今後新しくグルーピングしていく際は小学校単位となっていくこととなる。

行政経営担当部長:グルーピングをした場合に、その中の様々な地域対応施設が全て小学校に統合できるかという、規模や距離、耐用年数等の問題もあるので、現実的には無理があると思うが、考え方としては小学校を中心に様々な地域対応施設を集中させていこうと考えている。

D委員:AとBという小学校があって、どちらかに集約された場合に、AコミュニティとBコミュニティが全部Aに行ってしまうとなるとなかなか納得してもらえないし、実際物理的にも難しいと思う。学校の統廃合と、他の公共施設をそこに集約させていくという話が一緒になると混乱すると思う。複合化はしていくにしても、学校の規模の問題での統合を目的としたものなのか、それともコミュニティを集約して一つにまとめていくということを目的としたものなのかというのが説明の仕方によって誤解を招きかねないと思う。

公共施設マネジメント課長:14校になるのか、あるいは現段階ではもう少し大きくするのかということもあるが、まずは学校のグルーピングをしていくということを考えている。

D委員:学校のグルーピングと捉えてよいのか。

公共施設マネジメント課長:そうである。その上で今後変化していくと思うが、現在地域別の人口推計があるので、その年少人口等の状況も踏まえて、児童、生徒数がどうなっていくのかということ推計して、はたして周辺の地域対応施設が建て替え時期に同時に拠点となる小学校に統合できるのか、あるいはスケルトンインフィルで後から入るのか、あるいは単独で別に残るのか、色々な形が出てくると思うので、まずは学校のグルーピングをしていくということである。

D委員:そうすると資料1①の2ページの「一般原則」については、学校の再編に関するものと捉えてよいのか。

公共施設マネジメント課長:小平市として、グルーピングした時に小学校を拠点化するというのを打ち出しているので、コミュニティとまったく別にただ単に学校をグルーピングするということではなく、そこがコミュニティの拠点となるという位置づけにもなるということである。

A委員:19校から14校になった場合に、それが学校のグルーピングになると同時にコミュニティにもうまく適合していくといいということである。

C委員:資料1①の一番上の考えがまずないと、八小と十一小だけ先行して判断するというのはかなり難しいと思う。長期のスパンでどのような原理原則でグルーピングしていくかを考えて、それに沿って計画を進めていく形にしていけないと場当たりのことになってしまうと思う。学校の拠点化イコールコミュニティである。近くにある地域センターや公民館も含めたコミュニティということを考える必要がある。全市的にいえばどういう考えを基本にしていこうかということをうたってもらえれば判断しやすいと思う。

A委員:このグルーピングは八小と十一小の更新等の適否の判断と同時に出すということになるのか。

公共施設マネジメント課長:基本的にはそうである。グルーピングをした上で、八小と十一小についての案を出していくということになる。

行政経営担当部長:やはり何らかの考え方を持っているべきだと思う。小学校においては19のコミュニティがあるということもあるので、グルーピングの課題がすぐに出てくるような状況になるかと思う。どういう形で具体化して出すかということはまだこれからもう少し庁内でも検討する必要がある。

A委員:コミュニティの問題もあるが、学校の通学距離から考えれば近いところ同士となるかと思う。

B委員:距離的な課題が一番大きいと思うが、歴史的な距離もあると思う。どこの自治体も最初は第一小学校ができて、そこから人口が増えて、学校が増えていったという歴史があるが、そのことを知っている人しか知らないと思う。特に新しく住民となった人々は知らないと思う。住宅が増えて、利便性の向上のため公共施設や学校が共に増えてきたと思うので、そういう歴史的な変遷だとか距離については、住民に説明する際に重要な資料となると思うので、充実させていった方がいいと思う。そうするとグルーピングの必然性、根拠が見えて、話し合いやすくなると思う。

A委員:私もそう思う。まず第一小学校ができて、だんだん分かれていくという系譜があると思う。それもやはり示した方がいいと思う。

D委員:学校をグルーピングした場合に、2つの学校が統廃合されることが、そのままコミュニティも一つになるということを意味してしまうのかということでも市民の感じ方も違うのかなと思う。それはそういうことを意味するのか。

行政経営担当部長:施設を統合することと、コミュニティを一つにするということがイコールとなることではない。拠点として、ハードとしては一つとなるかも知れないが、コミュニティはそのままということもあり得るし、一緒になるということもあり得る。それを行政が誘導しよう

とか、あるいは19のコミュニティを14にしたいがためにこういうことをやっているわけではない。

D委員:学校としてはAの学校が拠点校となって、Aの地域のコミュニティ施設がそこに複合化されたとしても、B地区の空き施設にいくつかの施設が残るということはあるのか。

公共施設マネジメント課長:A校とB校の統合となると、A校に一本化して、地域対応施設もそこに入れていくということになるが、もう一つの考え方としては、A校の児童数が多くなり入り切れないため、廃校となったB校に地域対応施設を入れていくということもある。そこで問題となるのは、施設の総量を20パーセント縮減ということを掲げているので、面積的な検討をしていかななくてはならないことである。

D委員:長い目で見て最終的にA校に集約していくというような時系列での示し方はあるのか。

公共施設マネジメント課長:一度地域対応施設をB校に移して、さらにA校に移すということは全くないわけではないが、コスト的に難しいと思う。

C委員:青少対の活動は学校を中心として地域をまとめてくれているので、意見を聞いてスムーズにコミュニティ活動ができるようになればと思う。

公共施設マネジメント課長:青少対は昭和57、8年頃に中学校区から小学校区に市の方針を変えた。現在19の小学校で青少対が活発に活動している。小学校が統廃合された場合に与える影響というものも考えていかなければならないと思っている。

E委員:コミュニティゾーンというものは、公共施設マネジメントの中でのみ用いる枠組みなのか、それとも小平市の中で他の福祉関係や防災関係等においても用いるのか。

公共施設マネジメント課長:市では今、新しい長期総合計画を策定している。そこではコミュニティのあり方についても議論している。都市計画マスタープランでは中央、東、西地区に、地域包括ケアの関係では5地区に、民生委員、児童委員関係では6地区に分けており、様々な区割りがあある。それを一つのコミュニティゾーンとして統一するということは難しいと思う。ここでは学校の単位として捉えている。

E委員:市域が東西に長く伸びている中で、開発は東部の方がより進んでいる傾向が強いと思うが、仮に西部で拠点校が少なくなった場合にそれだけ一つのエリアが広くなるということになる。小平市全体で見ればまんべんなくあるのいいと思うので、東部の開発を抑えるという方策もあると思う。

政策課担当係長:開発にも色々あると思うが、例えば、今市で計画されているものでは市街地再開発事業がある。一番進んでいるのは小川駅西口であり、小平駅北口でも検討されている。都市計画マスタープランでは、都市構造上の大きな拠点として西の小川駅、中央の小平駅、東の花小金井駅という方向性を出している、その意味ではある程度まんべんなくバランスが取れていると思われる。

E委員:民間の開発を抑制していくということは考えていないのか。

政策課担当係長:民間の開発の場合、仮に抑制するとして、実際にどうやっていくかというのは難しいと思う。小平市の開発の場合、生産緑地が開発されるケースが多い。生産緑地が多く残っているのは西部である。このまま進んでいくと西部の開発が多くなると考えられる。一方で、生産緑地を宅地化していくのはいかなものかという考え方もある。市の方で積極的に開発を

抑えるというのは今の段階では難しいと思う。

F委員: 小学校を統合していく上で、子どもがランドセルを背負って歩いて通える範囲というのも加味してグルーピングを考えていってほしいと思う。

公共施設マネジメント課長: 国の規定では60分位である。小平市の場合は、子どもが歩いて通える範囲として検討することになると思う。

行政経営担当部長: 交通安全、防犯の面からも、通学区域そのものについても見直しも含めて考えていかなければならないと思う。

A委員: 資料1④と⑤について、八小と十一小は昭和45年以前の建築で設計基準強度が18ニュートン以下であり、コンクリート強度がそもそも弱く、本当に80年もつのかなと思う。そういうところを踏まえて前倒しも考えなければならないと思う。

D委員: グルーピングの仕方について、徒歩で通えるという定義をどうするかというところが親としては一番気になる点であると思う。国の基準で行くと相当な距離になってしまうので、例えば小平市の現状から19校から14校に減らした場合に最大でどのくらいになるのかというシミュレーションをしてみて、あまりにも遠すぎるという距離を超えないというような前提条件を整理してグルーピングをしていくという方針を出さないと、早い者勝ちで建ったところは生き残るといったような感覚になってしまうと思う。特に十一小はそういう条件を当てはめてみた場合でも、残る可能性が高いと思うので、こういう原則でグルーピングをしていくというものがあると安心だと思う。

A委員: 距離を見ても十一小は他から離れているので残るとは思うが、基本的な方針や一般原則を定めて判断していかないといけないと思う。

E委員: 年度内に出すのは八小と十一小の更新等の適否の判断のみで、一般原則についてはまだ時間がかかるということか。

公共施設マネジメント課長: 八小と十一小の更新等の適否の判断だけを先に出して、残りの17校について判断していくというのは難しいのではないかと思いますので、一定の基本的な考え方を出した上で八小と十一小の判断をしていくという形で考えている。

3 平櫛田中彫刻美術館記念館における更新等の適否の判断の検討状況について

資料2の概要を説明した。

A委員: 大規模耐震診断をして耐震補強をした場合どのくらいの費用がかかるのか。

文化スポーツ課長: 耐震診断をしないと正確な数字はわからないが、建て直すことにはならないと考えている。

A委員: 稼働状況を見ると、入館者数は平均で1日20人から30人であり、支出と収入は支出が約五千万円で収入が約五百万円、これに耐震診断と耐震補強代がかかる。クラウドファンディングも集まるかどうかわからない。これを残すのであれば、これだけの費用がかかっているということに市民の了解を得ない限り難しいと思う。

公共施設マネジメント課長: 記念館については大江宏氏による設計で非常に素晴らしいものであり

残すべきという声も多いが、ラワン材で作られており材質的に虫食いの影響もあるということ踏まえて検討していかななくてはならない。耐震診断もなるべく高額にならないように行っていく。見学者を中に入れるかどうかというところがあるが、基本的には残していくという方向性が妥当なのではないかと考えている。現在は中の見学も行えるわけだが、耐震診断の状況を踏まえた上で考えていきたいと思っている。

A委員:市民の意見を聞いて、それについても検討したらどうかと思う。収支の状況と文化財としての価値を訴えて、それで残すということであれば構わない。多額の費用がかかっているのがあるから、行政だけで考えるのではなく市民の意見を聞かなければならない。

D委員:クラウドファンディングするにしても、耐震補強した後も今までと同じ使い方なのかというところだと思う。稼げる施設に変えていくというか、ソフトの面での改善も同時に行っていないと、なかなかこの時代に文化的価値があるからということだけでは難しいと思う。イベント等が増えて入館者が増えてきているという状況もあるが、それがより安全になったことによって、民間が入るかかわからないが、もっと収入のある施設に変わっていくということがないと、市民は前向きに聞くことができない施設ではないかと思う。

C委員:ルネこだいらと共催したり等工夫していて、これからいい方向になっていけばいいと思う。学校にもチラシやポスターがあるが、先生がどれだけ平櫛田中記念館を理解していて、子どもたちに話せるかということ、おそらく少ないと思う。自分は学芸員の解説を聞いて本当に楽しかったし勉強になった。ぜひ子どもたちが関心を向けていけるように先生方に周知してほしい。

D委員:社会科見学のコースには入っていないのか。

文化スポーツ課長:入っている。

A委員:入館者数には社会科見学の数も入っているのか。

文化スポーツ課長:入っている。先ほどの先生への周知であるが、学校の先生を対象とした地域学習研修を行っている。その内容が生徒に伝わればいいと思う。学芸員は2人体制だが、ボランティアガイドの制度を使って多くの来館者に説明できるようにしている。

A委員:ソフト面を含め全体的にどうするか考えないといけない。ラワン材を使っていると虫害がかなりあると思う。

E委員:それだけ価値があるということであれば、小平市が支えるのはもちろんだが、国や都等に補助金等の働きかけをしているのか。

文化スポーツ課長:記念館が建って50年になるが、都の有形登録文化財の制度に手を挙げることができるので、そういった補助金を活用していくということも考えている。

E委員:先ほど委員から話があった市民意見を聞くというのは、どのような方法で行うのか。

A委員:市もアンケート等様々な手法を行っているようなので、適切な方法を検討していけばいいと思う。

公共施設マネジメント課長:更新等の適否の判断については推進委員会の助言をいただいているが、市民参加を行っていない。

A委員:残すにしてもソフト面やコスト面を検討していかなければならない。

4 今後の市民参加について

(中央公民館周辺エリア・小川駅周辺エリアの公共施設の複合化等について)

資料3の概要を説明した。

E委員:基本計画策定等支援業務委託のプロポーザルには何社の参加があったのか。現在はどのような状況なのか。

公共施設マネジメント課長:1社の参加があり、審査の結果その業者に決定した。

E委員:前回の推進委員会で市民参加や計画策定が得意な業者や建設系の業者があるという話が出ていたが、今回の決定業者はどういった特徴を持ったところなのか。

公共施設マネジメント課長:市民参加や計画策定が得意な業者であると捉えている。

A委員:以前施設を視察した際には、子ども達の利用が多いようであった。「次の世代の施設を考えよう」と掲げていることもあるので、子ども達の意見を取り入れる方法を考えた方がいいと思う。

公共施設マネジメント課担当係長:中央・小川デザインプロジェクトは複数の市民参加の手法で構成している。その中にアンケートがあり、学校にお願いする等、若い世代の声を拾うことができるようにしていきたいと考えている。

D委員:準備会についてはどのように広報したのか、また参加者の属性はどのようなものであったのか。

公共施設マネジメント課担当係長:市ホームページ、市報、自治会へのちらし配布等を行った。属性に関してはアンケート等を取っていないので正確なところはわからないが、50代から上の方が多かったように思う。

D委員:子育て世代の参加はなかったのか。

公共施設マネジメント課担当係長:見当たらなかったように思う。

E委員:利用者・利用団体ヒアリングについて、平日の昼間にしか設定されていないようだが、都合がつかない場合はどうすればよいのか。

公共施設マネジメント課長補佐:各所管と調整して利用者が参加しやすい日程に設定した。また、1回だけでは参加できない場合が出てくるので、2回ずつの開催にした。

E委員:どうしても参加できない場合は個別に対応するということか。

公共施設マネジメント課長補佐:なるべくこの日程で参加していただきたいと考えているが、それ以外の日時で対応できないということではないので、個別に対応させていただく。

A委員:ヒアリングは平日の昼間の開催で、準備会は50代以上の参加が多かったということなので、どうしても意見が偏ってしまうと思う。もっと若い世代の意見を聞くことができる工夫をすべきだと思う。

B委員:ヒアリングをさせていただいた方がデザインカフェに参加してもらうような働きかけをしてもらいたいと思う。自分の意見だけを言うのではなくて、他の世代の方の意見を聞いた上で考えた方が建設的な話し合いになると思う。市民が公共施設のことを考えて参加できるいいチャンスだと思う。自分は小川駅周辺の景観まちづくりセミナーに関わっているが、小川駅の

いいところは若い世代の利用が多いということであるという意見があった。中央公民館周辺と小川駅周辺のそれぞれの特徴を生かした話し合いができるといいなと思う。セミナーでは立場の違う人が一緒に時間を過ごすということの重要性を感じたので、中央公民館周辺エリアに小川駅周辺の住民が参加して、その逆もあるような情報提供等をしていただければと思う。

A委員:色々な意見を聞いて集約していく工夫をしていく必要があると思う。

D委員:習志野市ではワークショップで託児サービスを行っていたので、検討してほしい。それがあると夫婦で参加するケースもある。

A委員:子育て世代の参加のために、できればちらし等に託児サービスを追加してほしい。

B委員:小川西町公民館は若い世代の利用が多いようなのでチャンスだと思う。

公共施設マネジメント課担当係長:公民館の利用者にデザインカフェのちらしを配布したり、先日もなかまちテラスで職業能力開発大学の学生にも配布した。こちらから出向いてアピールしていくことも引き続きしていきたい。また託児サービスや手話通訳を準備したり、障害者自立支援協議会に出向いたり等、多様な層が参加可能な環境の整備を検討していきたい。

E委員:資料3①に平成31年8月にパブリックコメントの実施とあるが、決まった後に意見を求められても困るという意見をよく聞く。10月に策定予定でその2カ月前にパブリックコメントを行ってどうするのかという気もする。事前に最初の段階で市民の意見を聞いているという説明であればわかるが。

公共施設マネジメント課長:パブリックコメントの前の段階で市民参加で意見を聞いているということである。

E委員:中央・小川デザインプロジェクトの手法を見ると、参加のハードルが高いイメージがある。意見箱を設置するなど、もっと簡単に意見を言えるようにしてほしい。

A委員:ホームページを使ったり、アンケートをもっと幅広くしたり、やり方はあると思う。

E委員:ここに入れてくださいというものと、反対の意見ばかりが来るかもしれないので、ホームページ等を使うなり、無作為抽出のアンケートを行うなどしてなるべく多くの声を拾い上げていく工夫をするとだんだん見えてくるのかなと思う。

B委員:床面積を削減しようとしている進め方にインパクトがあるので、話し合いの中でどのような舵取りをしていくのかはわからないが、今までにない公共施設の要素にチャレンジするいい機会だと思う。新しい世代の意見を中心に聞くことで新しい機能を具体的に検討していく材料として出てくると思う。どこで市がイニシアティブをとれるかというのがポイントだと思う。市の考えをどこかで出していったって考えてもらわないと、期間が短いので間に合わなくなってしまう、魅力的なものが作りにくくなってしまうということになりかねない。

5 その他

E委員:調査特別委員会ではどのような意見が出たのか。

公共施設マネジメント課長:市民参加、基本計画策定の進捗状況、複合化の効果・対象施設・検討状況、延べ床面積の縮減、人口の動向、主管課をどこにするのか、平櫛田中彫刻美術館記念館の建物価値・駐車場、小川駅西口・中央公民館周辺施設の再配置、福祉機能の再配置、中央公民

館の駐車場、鈴木遺跡、八小遺跡、学校施設の更新・複合化・拠点化、施設への交通アクセス、跡地の方向性について等であった。

6 閉会